

2019 年度比較政治学会年次大会

共通論題「民主主義の脆弱性と権威主義の強靱性」

企画委員長 粕谷祐子（慶應義塾大学）

ここ数年、選挙で選ばれたリーダーが民主主義を壊そうとする動きが注目を集めている。アメリカのトランプ大統領、トルコのエルドアン大統領、ハンガリーのオルバン首相、フィリピンのドゥテルテ大統領などである。一方で、権威主義体制の多くでは民主化に逆行する政治的締めつけが強化されている。習近平政権下の中国、プーチン大統領のロシア、フン・セン首相のカンボジアなどがその例である。このような現象は、これまで研究者が「あたりまえ」とみなしてきた政治の基層そのものに対する見直しを迫っている。言い換えると、先進国における民主主義の定着、新興民主主義国における民主化の不可逆性、冷戦構造崩壊後の世界的な民主主義広がり、といった見方は「ナイーブなもの」になりつつある。そして、「民主主義の脆弱性と権威主義の強靱性」が同時に立ち現れているのが現在の特徴であると言えるだろう。

このような状況を受け、本共通論題では、民主主義理論、アメリカ政治、中国政治を専門とする研究者に、それぞれの専門の観点から次のような問いを検討してもらおう。民主主義が機能しにくくなる要因および権威主義が強化される要因にはどのようなものがあるのか。この状況は今後も継続が予測されるのか。前述した現実政治の動きを受け、比較政治学が取り組むべき新しい課題があるとすれば、それはどのようなものなのか。

司会 粕谷 祐子(慶應義塾大学)

報告 空井 護(北海道大学) 民主主義理論

待鳥 聡史(京都大学) アメリカ

川島 真(東京大学) 中国

討論 末近 浩太(立命館大学)

平田 武(東北大学)

分科会企画 「権威主義体制における権力継承」

企画委員 油本真理（北海道大学）

比較政治学において、権威主義体制の持続は多くの研究者の注目を集めてきたテーマである。その中でも、現指導者から次世代の指導者への権力の継承は、権威主義体制の長期にわたる持続を直接的に左右しうる最重要局面の一つであると言える。まず、後継者が誰になるのか、そしてその後継者にいかなるタイミングで権力が委譲されるのかは体制の根幹にかかわる大問題であり、エリート間の均衡を不安定化させる可能性とも隣り合わせである。また、権力継承の態様によっては政治体制の自己規定の仕方を変更する必要性が生じることもある。体制がこの局面をうまく乗り越えられるかどうかは権威主義体制の長期にわたる持続の鍵を握るといっても過言ではないのである。

本分科会では、権威主義体制下における権力継承の実態を把握すると同時に、その背後にあるロジックをよりよく理解するため、各国における実際の権力継承の事例の検討・比較を行う。もっとも、権力継承にも様々なタイプが含まれることから、本分科会では、その中でも特に重要な位置を占める世襲の事例比較を軸とした上で、そこに世襲によらない継承の事例や失敗例との比較の視点を加えるという構成をとる。本分科会で取り上げるのは、社会主義体制でありながら3世代の世襲が実現した北朝鮮、今世紀、新たに共和制下で大統領世襲に成功したアゼルバイジャン、そして世襲を前提とした湾岸諸国の君主制の事例である。

- 司会 油本 真理（北海道大学）
報告 磯崎 敦仁（慶応義塾大学）北朝鮮
立花 優（北海道大学）アゼルバイジャン
石黒 大岳（アジア経済研究所）湾岸諸国
討論 宇山 智彦（北海道大学）
横田 貴之（明治大学）

分科会企画「比較政治学における歴史的説明の可能性」

企画委員 岡田 勇 (名古屋大学)

P. ピアソンの『ポリティクス・イン・タイム』以来、「歴史的説明」あるいは時間軸を考慮した説明は、比較政治学においてより理論的に見直される機運が高まった。それは過去 20 年くらいの中に、質的方法論についての議論が高まったり、あるいは新制度論が理論的に発展してきたこととも関係してきた。それまで多くの研究が、明示的あるいは黙示的に、歴史的背景を1つの要因としたり、あるいは歴史的過程自体を用いて説明を行ってきた中で、そうした説明要因や説明手法としての歴史・時間について、さらに深い理解が求められる時代に我々は生きるようになっている。

では、歴史的説明は、今日の比較政治学においてどのように用いられうる、あるいは用いられるべきなのだろうか。歴史的説明を試みる場合に注意すべき点は何だろうか。また、歴史的説明とより親和性が高い研究テーマが存在するのだろうか。本パネルでは、こうしたチャレンジングな問いにあえて踏み込んで、様々なバックグラウンドをもつ比較政治学者の間で議論する場を設けたい。

- 司会 岡田 勇 (名古屋大学)
報告 北山 俊哉 (関西学院大学)
馬場 香織 (北海道大学)
向山 直佑 (オックスフォード大学・院)
討論 伊藤 武 (東京大学)
西川 賢 (津田塾大学)

従来の福祉国家研究では再配分政策に関心が集まる一方で、歳入構造が注目されることは相対的に少なかった。再配分政策と同様に、税・社会保険料の規模や仕組みは各国で異なっており、所得再配分効果にも違いがあることを踏まえるなら、歳出だけでなく歳入にも目を向けて福祉国家を論じる必要があるだろう。

また、現在の福祉国家は新旧の社会的リスクへの対応を迫られると同時に、健全財政も求められており、財源の調達が重要な政策課題となっている。財政状況の悪化が顕著で、福祉財政が逼迫する日本にとってはより切迫した課題といえるだろう。

税・社会保険料を含めた福祉財政制度については財政学に基づく研究が蓄積されつつあるものの、政治学からのアプローチは依然として多くない。本分科会では、各国の税・社会保険料の規模や仕組みがどのように発展し、そこで政治はいかなる役割を果たしたのか、を中心的な問いとする。理論的考察に加え、異なる福祉国家類型に属する三つの国（オーストラリア、フランス、日本）を取り上げて、この問題について検討を試みたい。

司会 近藤正基（京都大学）

報告 加藤雅俊（立命館大学）理論、オーストラリア

千田航（釧路公立大学）フランス

上川龍之進（大阪大学）日本

討論 加藤淳子（東京大学）

近藤康史（筑波大学）

分科会企画「ポピュリズムの現在と政治制度への影響」

企画委員 菅原 和行（福岡大学）

20 世紀末より、先進諸国においてポピュリスト政治家の出現やポピュリズム政党の台頭が相次いで見られ、学界においてもポピュリズムへの関心が再び高まっている。とりわけ、欧米各国では、従来、ポピュリズム勢力が既存の政治勢力を脅かすまでの影響力をもつことはまれであったが、近年では排外主義や反エリート主義の世論を背景として、政治の表舞台に登場する場面がたびたび見られるようになった。かつては疎外された一部の人々からの問題提起であったが、現実にはポピュリスト政治家が政権を掌握し、ポピュリズム政党が議会内で強い影響力をもつに至り、今後、各国のポピュリズムはどのように展開していくのか、また各国の政治制度に実質的にどのような影響を与えるのかなど、いまだ見通せない部分も多い。こうした状況を受け、学界においてもポピュリズムは一過性の課題ではなく、継続的に検討の必要な課題として位置づけられつつあるように思われる。

本分科会はポピュリズムの定点観測的なセッションとして、近年の欧米各国におけるポピュリズムの動向を分析する。とりわけ各国における議会選挙や政権交代を契機として、ポピュリズムの性格にはどのような変化が見られたか、各国の政治制度（議会制度、政党政治、統治機構など）に実質的にどのような影響を及ぼしているかなどの点を中心に考察したい。また、各国におけるポピュリズムの時系列的な変化に加え、国や地域の違いによりポピュリズムの性格にはどのようなバリエーションが見られるか、といった点もあわせて考察したい。

司会 菅原和行（福岡大学）

報告 前嶋和弘（上智大学） アメリカ

八十田博人（共立女子大学） イタリア

安井宏樹（神戸大学） ドイツ

討論者 渡邊容一郎（日本大学）

分科会企画「保護主義と国内政治」

企画委員 杉之原真子（フェリス女学院大学）

不可逆に見えたグローバル化に反転の動きがみられる。戦後の国際秩序形成を牽引してきたアメリカが、トランプ政権下で方向転換したのを筆頭に、保護主義的貿易政策の応酬や、ヒトの移動の制限、対内直接投資への規制導入などが各地で見られ、自由主義的な考え方に基づいて構築されてきた国際秩序を揺るがしている。

その背景に、各国の国内政治要因があることはしばしば指摘されている。格差の拡大などの社会不安がグローバル化への反発に結び付いていると説明されることは多いが、よりの確な理解のためには、社会のどのような層が、どのようなタイプの保護主義を要求しているのか、そしてその理由はどこにあるのかに関して、精緻な分析が求められる。また、政治的動機からグローバル化への反発を利用したり煽ったりするアクターの存在も、重要な説明要因である。さらに、国際レベルにおける保護主義的な動きの応酬が、各国の国内政治の展開に影響を与えるという「逆第二イメージ」の作用も見られるだろう。

ここでは、先進各国における保護主義的な動きと国内政治との関係を比較検討し、国・地域ごとの違いや共通点を見出しつつ、グローバル化の中で生じた保護主義と国内政治の相互作用について分析を深めたい。

司会 久米 郁男（早稲田大学）

報告 富田 晃正（埼玉大学）「アメリカの貿易政策と国内政治」（仮）

若松 邦弘（東京外国語大学）「Brexitと国内政治」（仮）

佐藤 俊輔（日本国際問題研究所）「欧州の移民問題」（仮）

討論 久米 郁男（早稲田大学）

板橋 拓巳（成蹊大学）